

修羅、風、恩寵

牧師 山本 護

春。地に、空に、伝道所の庭を渡る風に、圧倒的な生命力があふれいで、ふいに恐ろしいような感じを覚えて、集会所へ逃げ込みました。この感触、どこか覚えがあるぞ、何かで読んだのか、と記憶を探ると…、あっ『春と修羅』か、宮沢賢治の。



「いかりののがさまた青さ／四月の気層のひかりの底を／唾し はぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」。

「おれ」は命あふれる春の中で呻吟し、ただ自らの修羅を自覚するだけにとどまりません。純度の高い天の風と、俗なる地の風を同時に吹かせて、世の罪性をも告発しているのだと思います。己が修羅を率先して表明しながら。

天の風とは「れいらうの天の海には／聖玻璃の風が行き交い」。地の風とは「まことのことばはうしなはれ／雲はちぎれてそらをとぶ／ああかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」。世は春、命の風が吹いても、まことの言葉は失われ、歯ぎしりせざるをえない。天には聖なる玻璃(水晶)の風が吹いているのに。

『注文の多い料理店』や『銀河鉄道の夜』では不吉なことが起こる前兆として、「冷たい風」が吹きます。宮沢賢治は、自然に対する過敏すぎるそのアンテナで、命の春風に凶作をもたらすヤマセ(冷夏の風)をも感じ取り、歯ぎしりしたのかもかもしれません。

旧約聖書のヘブライ語も、新約のギリシア語でも、「風」という言葉は「霊」「息」と同義語。預言者の言葉を聞いてみましょう。「霊よ、四方から吹き来たれ、霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る(エゼキエル 37:9)。「見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る(37:5,14)」。このような預言の文脈自体からも、霊と息と風は一つのものであることが分かります。

人間を死の拘束から解放し、新しい命を与える霊。これが恩寵なる「風」です。宮沢賢治は命あふれる春風の中で、自らが修羅である実感を隠さずに告白しました。今年の春、私もなにがしかの修羅を感じて狼狽したのでしょうか。聖書の教えとしては知っていましたが、私を吹き抜けていく神の息、霊の圧倒的な恩寵がふいに恐ろしくなって、そこを逃げ出したのかもかもしれません。木の間に隠れたアダムのように(創世 3:8)。Ω